

No. 4

2023/12/18

小野友道の

## お節介な戯言

## 手術用手袋誕生秘話

—手術主任看護師への恋心から生まれた手袋—



今日、素手で手術につく看護師など想像すら出来ないでしょうが昔はそうでした。医師も然りです。そのかわり手洗いは殊の外厳しく時間をかけてブラシでヒリヒリする位でした。筆者の入局1, 2年の頃も確かそうだったのです。現在は手袋着用はもちろん必須で、二重手袋が推奨されています。この手術用手袋開発にはお面白いエピソードがあります。19世紀末、世界的にまだ手術は素手でなされていました。アメリカの名門ジョン・ホプキンス大学病院も例外ではありませんでした。手術主任のキャロライン・ハンプトンも現在では使われない昇こう水（塩化第2水銀）で丁寧に手洗いをし、それによる手のかぶれ（湿疹）に苦しんでいました。この手に悩む看護師に恋心を抱いた有名な外科医ウィリアム・スチュワート・ハルステッドは、彼女の手をどうにか出来たらきっと彼女は自分のことをと思い、考えた挙句創立されたばかりのグッドイヤー（現在の大手タイヤメーカー）に頼んでゴムの手袋の試作を依頼したのでした。この手袋のプレゼントが功を奏し（？）て、キャロラインはハルステッド夫人となりました。ハルステッドは彼女の手湿疹の治療が目的だった手袋が、実は無菌的手術に大きな大きな役割をなすことに後で気づいたのでした。すでに述べた手洗いの重要性から、さらに大きな進歩、夢の無菌手術に向かうエポックメイキングな出来事としてゴム手袋開発のきっかけを作ったハルステッドの功績は彼が開発した多くの外科手術術式にも劣らない偉大なものです。

偉大な発見・発明の動機は意外なところにあるのですね。皆さんにもチャンスがあるかも知れません。しかし、じっと相手を眺めすぎたら変態と思われ嫌われるだけで、何も発明できないで終わるかも。ご用心、ご用心。